２０２１年１１月２１日　「主は心を見る」高橋克樹牧師
サムエル記上１６章１～１３節、マルコ福音書１０章１７～３１節

紀元前１２世紀から紀元前１０世紀頃、イスラエルはアンモン人やペリシテ人、アマレク人による圧迫を受け、それらの諸外国人によって隷属化され、民族存亡の危機に直面していました。紀元前１０５１年頃、最後の士師サムエルは年老いて指導力を失ってしまったために、周辺の強国と同じように自分たちも強力な軍隊を持つ王制を導入することを求めるイスラエルの民の要求に譲歩して、サムエルはサウルに油を注いでイスラエルの初代の王にします。

最初、サムエルは王制の導入には消極的で『裁きを行う王を与えよとの彼らの言い分は、サムエルの目には悪と映った』（同８章６節）ので、主（ヤハウェ）に祈って神の御旨を尋ねました。すると、主（ヤハウェ）は彼らの声に従うようにサムエルに言いますが、王制を導入すると、どういうことが起こるかについて、警告をするように言います（サムエル記上８章１０～１８節参照）。その内容は、①王は、あなたたちの息子を徴用し、戦車兵や騎兵にして王の戦車の前を走らせる、②王のために耕作や刈り入れの労働に従事させ、武器や戦車の用具を造らせる、③あなたたちの娘を徴用し、香料を作らせ、料理女、パン焼き女として働かせる、④あなたたちの最上の畑、ぶどう畑、オリーブ畑を没収し、家臣に分け与える、⑤あなたたちの穀物とぶどうの十分の一を徴収し、重臣や家臣に分け与える、⑥あなたたちの奴隷、女奴隷、若者のうち優れた者やロバを徴用し、王のために働かせる、⑦あなたたちの羊の十分の一を徴収する。……こうして、あなたたちは王の奴隷となり、自ら選んだ王の故に泣き叫ぶが、そのときはもはや主は応えては下さらない。

主（ヤハウェ）は王制の導入によって起こり得るイスラエルの課題を挙げましたが、結局イスラエルの民は王制導入に踏み切るのです。サムエルによって油を注がれてイスラエルの最初の王となったサウル（サムエル記上１０章１節以下）は、ずっと神の御心に適う人物なのかどうかを神によって試されてきました（サムエル記上９章～１５章）。史実的には、サウルと息子ヨナタン、いとこのアブネルに加えて、後から指導部に加わったダビデの４人が協力してサウル王国を指導して対外的な戦闘を行い、ペリシテによって半隷属状態にあったイスラエルを軍事的にも独立させ、国家の体裁を整えていったのでした。ペリシテを撃退してイスラエル部族連合の主要な土地を回復させたのち、モアブ、アンモン、エドム、ツォバの王たちにも勝利したのでした（サムエル記上１４章４７～４８節）。しかし、この勝利によって王制が本来抱えている課題も浮上してきました。サウルは王として家臣があげた戦果に応じて土地などの褒賞を与えなければならなくなったのですが、一方でイスラエルの自営農民は嗣業の土地を勝手に処分できないために色々な矛盾が生じてきたのでした。そのような状況の中で預言者サムエルはイスラエルの宿敵アマレク人を撃つことをサウルに命じます（サムエル記上１５章１節以下）。アマレクは出エジプト以来の宿敵でした。サムエルは宿敵アマレクをヤハウェの敵として『アマレクに属するものは一切、滅ぼし尽くせ』（１５章３節）と、古典的聖戦を命じたのです。にもかかわらず、サウルは『アマレクの王アガグを生け捕りにし、その民をことごとく剣にかけて滅ぼした。しかしサウルと兵士は、アガグ、および羊と牛の最上のもの、初子ではない肥えた動物、小羊、その他何でも上等なものは惜しんで滅ぼし尽くさず、つまらない、値打ちのないものだけを滅ぼし尽くした』（１５章８～９節）のでした。さらに、サウルはカルメルに行って自分の戦勝碑を建てたのでした（１５章１２節）。

サムエルは純粋に信仰の立場から聖戦を要求したのですが、サウル王は国の勢力拡大のために戦ったのでした。このことが決定的にヤハウェとの対立を生み出し、主は『わたしはサウルを王に立てたことを悔やむ。彼はわたしに背を向け、わたしの命令を果たさない』（１５章１１節）と断罪しました。サウル王は神の命令に背いただけでなく、上等な羊や牛も生かしたままにし、利益を得

ようとしたのです。これは、おそらくは兵士への報奨金にしようとしたのでしょう。いずれにしてもサウル王は神に背いたのです。主の命令はアマレク人を聖絶（「滅ぼし尽くす」）することであり、それは罪にまみれ汚れたものをすべて廃絶することでした。そこで神が求めたものは、神の声に聞き従うことなのです。罪を自覚したサウルは預言者サムエルに『わたしは、主の御命令とあなたの言葉に背いて罪を犯しました。兵士を恐れ、彼らの声に聞き従ってしまいました。どうぞ今、わたしの罪を赦し、わたしと一緒に帰ってください。私は、主を礼拝します』（サムエル記上１５章２４～２５節）と懺悔しますが、時すでに遅く、サムエルは『あなたが主の言葉を退けたから、主はあなたをイスラエルの王位から退けられる』（１５章２６節）と、既に主がサウルを王位から退ける決定を下したことを断言したのでした。

イスラエルの最初の王となったサウルの盛衰をみると、主の意志に従うことが王の義務であることがよくわかります。それは権力や栄光を求める人間的な心を超えて主に従うことがイスラエルの王としての大原則だからです。

さて、本日のテキストであるサムエル記上１６章１～１３節はサウル王に代わってダビデが油を注がれて王になった経緯を記した個所です。ダビデがサウルに代わって王となっていく過程は、サムエル記上１６章からサムエル記下６章までに描かれています。サウルの没落とダビデの台頭という２つの対照的な主題が対立的に描かれていきます。ヤハウェがサウル王に代わって『王となるべき者』の所在を初めて明らかにした個所です。その人物はユダのベツレヘムの羊飼いエッサイの息子たちの中にいるというのです。

主（ヤハウェ）はサムエルに『角に油を満たして出かけなさい』（１節）と言って、ベツレヘムのエッサイの子どもの中に『王となるべき者を見いだした』（１節）ことを告げます。油は新しく王になる人物を聖別するときに用いるものです。このときのサムエルはいまだにサウルを心情的に見捨てることができないままでいました。しかし、サムエルは人間的な思いを越えて主に従ったところにサウル王との決定的な違いがあります。主がエッサイの息子たちの中に王となるべき人物を見出したとサムエルに言ったとき、サムエルはサウルによって殺害されるかもしれないと恐れを抱きます。おそらくサムエルがサウルに王位から退けられると言った（１５章２６節）ことで、サムエルはサウルの監視下におかれたのでしょう。それは預言者サムエルが次の王に油注ぎをすることが懸念されるからでした。また、ラマからベツレヘムに行くためには、サウルがいるギブアを通過しなければなりません。いずれにせよ、サムエルがベツレヘムに行くことはサウルの猜疑心を引き起こす危険性が高かったようです。そこで主は犠牲をささげるためにベツレヘムに行くようにと、いけにえを持参して赴くように助言します。

一方、ベツレヘムでサムエルを出迎えた町の長老たちは不安を抱きます。サムエルがサウルに主の意志として退位を告げたことが既に世間に知られていたのでしょう。両者のいざこざに巻き込まれることを懸念したのでしょう。サムエルはそのような長老たちの懸念を払拭するために、主にいけにえをささげるために来たことを告げ、参列することを勧め、エッサイとその息子たちを、いけにえの祭儀に招いたのです。

サムエルがエッサイの長男エリアブを見たとき、心の中で「まことに主の前に油を注がれる者が立っている！」と思いました。しかし、主は外見や背の高さで判断してはならないと告げ、エリアブを退けました（１５章２３節や１６章１節と同じ「退ける」という言葉が用いられている！）。そして、『主は心によって見る』（１６章７節）と言うのです。サムエルに人を見る目がないわけではないでしょうが、主はその人が神に対して従順になり、へりくだることができるのか、その「心を見抜く」と言うのです。つまり、神との関係において自分の考えや行動を判断していくかどうかということを「主は心を見る」と表現しているのです。

長男のエリアブに続いて、二男のアビナダブ、三男のシャンマを呼んでサムエルの前を通らせましたが、６人の息子たちを主はお選びにならなかった。そこで最後に７番目で末息子のダビデが呼ばれることになります。おそらくダビデはいけにえの会食に普段なら列席できない子どもとみなされていたのでしょう。「主は心を見る」とは、どういうことか。人間は外面を、主は内面を見るということでしょうか。そういうことであるならば、善良な心を持っていることが神の選びの基準なのでしょうか。

主は人間にただ無批判的にご自分の意志に従うことを求めてはいません。『神との関係において自分を見る心』を持っているかが大切なのです。イスラエルの王はアンモン人、ペリシテ人、アマレク人などの敵国から民を守るだけでなく、民が自分自身を神との関係において形成されていくように導く責任があるのです。確かにサウル王はイスラエルの民を敵国の侵攻から守ったのですが、「神との関係で、王としての使命を果たす」思いには至らなかったのです。主イエスの先祖となったダビデはベツレヘムの出身です。マリアとヨセフが人口登録のためにベツレヘムに行きました（ルカ２章４節）。イザヤ書１１章１～２節には『エッサイの株からひとつの芽が萌えいで、その根からひとつの若枝が育ち、その上に主の霊がとどまる』とありますが、ここでの「エッサイ」とはダビデの父親のことです。また、「株」は切り株のことで、ダビデ家が断絶することを意味しています。のちにバビロン捕囚によってダビデ家が断絶して絶望的な状況に陥るけれども、新しい希望の芽が萌え出で、メシアが到来するという預言です。

さて、油注がれたダビデは『その日以来、主の霊が激しくダビデに降るようになった』（１６章１３節）のでした。一方サウル王に対しては、『主の霊はサウルから離れ、主から来る悪霊が彼をさいなむようになった』（１６章１４節）のです。この対比は何を意味しているのか。単に主の霊がサウルからダビデに移っただけではないでしょう。主の霊が降るということは、神のコントロール（導き）の下にあるということなのですが、サウルの場合にはそれがなくなったのでした。主から悪霊（原文では「神の悪しき霊」）が降るというのは、神との関係性を断った者が陥る状態のことなのです。

その後、サウル王はダビデをねたむようになります。『神からの悪霊が激しくサウルに降り、家の中で彼をものに取りつかれた状態に陥れた』（１８章１０節）のでした。また、ダビデを殺さないと息子ヨナタンに誓っておきながら、従来のようにダビデがサウル王に仕えるようになると、竪琴を弾くダビデを槍で殺そうとしたときも『主からの悪霊がサウルに降った』（１９章９節）のでした。サウルの場合、悪霊はダビデとの関係を断絶したときに降っています。このことは、隣人との関係性を失った者は、神との関係性も失ってしまうことを示しています。

この世の中には、「神と関係がない」と考えて生活している人がたくさんいます。自分は神を信じていないし、神と関わりを持とうと考えたこともないと言う人がいますが、自分が意識をしなければ「関係がない」と言い切れるのでしょうか？　相手が自分のことをどのように考え、どのように関わっているかを無視・拒絶しながら、実際には支えられている関係性の中で生かされている人は、この世にたくさんいます。自分が神と関係がないと考えているからと言って、神は支えていないのでしょうか？　主の霊は、主を信じる者に降ります。サウルから主の霊が離れたので、彼は神から棄てられたと感じたことでしょう。その代わりに「神から来る」悪霊によっておびえさせられることになります。このことを別の視点からみると、サウルに対して「神から来る」悪霊は依然として降っているということは、王としては神によって退けられたけれども、人間としては捨てられていないということではないでしょうか？　確かに「神から来る」悪霊はサウルをさいなむようになりました（フランシスコ会訳は「おびえさせた」と訳しています）が、それは神の御手から離れていないということをも示しているのです。悪霊が降るのは、サウルがアマレク人との戦いでなし

たことに対して、神が王位を退けた処置を正直に認められないことに起因しているのです。「神から来る」悪霊は、神の御手が依然として支えていることの証なのです。さらに大切なことは、神はダビデを用いてそのようなサウルを慰めるように導いている点です。

１６章２３節では『神の霊（これは「悪霊」のことでしょう）がサウルを襲うたびに、ダビデが傍らで竪琴を奏でると、サウルは心が安まって気分が良くなり、悪霊は彼を離れた』（１６章２３節）とあります。このようにサウルが王位を退けられた後も実は神は彼を支えているのです。

サウル王の心理的な病は現代風に言うならば、さしずめ「パーソナリティ障害」と言えます。この障害を持つ人の特徴は「自分に強いこだわりを持っている」点です。口に出して言うか言わないかは別にして、自分に囚われています。素晴らしい理想的な自己像がある一方で、逆に強烈な劣等感にまみれた惨めな自己像を持っています。いつもその両極端の自己像の強迫観念から逃れられないのです。これらの症状は「自己愛がうまく発達していない」ために起こるものです。自己愛は自分を愛し大切にする能力のことですが、これが適切に育っていないと「自分に自信が持てない」「自分が愛せない」だけでなく、対人関係で相手が自分を傷つけたり、自分を責めているように感じてしまい、正常な関係性が築けなくなります。過剰に膨らんだ自己愛と、しぼみすぎた自己愛とがバランス悪く共存しているためです。このようにパーソナリティ障害の人は自己愛が正常に働かないために非常に生きづらい人生を歩んでいる人なのです。

心が見えなくなったのです。そのサウルにダビデという「ねたみの対象」が生じるのは必然です。なぜなら、神から離れた人は自分に強いこだわりを持つようになってしまい、人のことを信頼することができず、とても過剰で極端な判断するようになって、「他者を受容できない」からです。神との関係を喪った人は、非常に生きづらい人になってしまうのです。それを執り成すのが、私たちの救い主イエス・キリストなのです。